

# 額見町遺跡

(額見町遺跡B地区)

串・額見地区土地区画整理事業関連  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書—2—



1999  
石川県小松市教育委員会

## I. 頬見町遺跡の背景

額見町遺跡は石川県小松市の西南部区域にあたる月津台地の北西部に位置します。月津台地はその昔3つの湖に囲まれていて、西に日本海を見渡し、東は山々へ続くという立地をしていました。当時は絶好の景観と豊かな生活の場とを兼ね備えていた台地であったと言えるでしょう。

本遺跡は、この台地上に営まれた約250,000m<sup>2</sup>に広がる古代の集落遺跡です。本遺跡の西南部には、同じく古代集落遺跡である茶臼山祭祀遺跡、額見町西遺跡が存在しています。額見町西遺跡では、石川県立埋蔵文化財センターが平成9年度に発掘調査を行なっており、オンドル状造構を伴う堅穴住居跡が3軒見つかっています。これらの古代遺跡は、台地の西側に集中しており、額見町古代遺跡群と総称しています。5万m<sup>2</sup>を超える面積の大きな古代村落が存在していたのです。

古代についてちょっと考えてみましょう。飛鳥時代は、新しい政治を行う準備を整えていったと言える時代です。そして奈良に都が築かれ、律令政治が始まります。この時期、加賀国はまだできておらず、この地域は越前国の江沼郡に属していました。そして、江沼郡はさらに9つの郷に分かれています。額見町周辺はこのうちの「額田郷」に属していたと考えられています。郷の範囲は、現在の加賀市動橋川流域付近から分校を経て額見町までであったようです。遺跡分布からみて、大きな集落遺跡は他に確認されていないことから、額見町古代遺跡群が郷の中心ではなかったかと予想しています。しかし、残念ながら今のところそれを示す資料は発見されていません。



額見町遺跡の位置

## 目 次

I. 頬見町遺跡の背景	1
II. 調査にはいるまでとこれまでの調査	2
A地区調査概要	
III. 今度の調査でわかったこと	3
1. B地区の調査概要と全体像	3
2. さまざまな堅穴住居跡	5
3. 据立柱建物跡に見る家と倉	9
4. 土器作りと渡来人	11
5. 鎌冶炉と鉄器作り	13
6. 土器を埋める祭り	14
IV. 土器は語る	15
1. 遺物整理の仕方	15
2. 古代の土器からわかること	17
V. さいごに	22



並んでいる家の跡（額見町遺跡B地区）

## II. 調査にはいるまでとこれまでの調査

### A 地区調査概要

発掘調査を行なうことになった原因は、小松市施行の工業団地造成工事によって台地北側が削られるためです。発掘調査面積は、工事範囲の遺跡確認部分38,000m<sup>2</sup>（このうち公園保存区域4,800m<sup>2</sup>を除く）を対象にしています。大規模な調査面積をA～Gに地区割りし、平成12年度完了の予定で、平成7年9月より開始されました。A地区的5,500m<sup>2</sup>は、平成7・8年度に完了し、昨年度概要報告書－1－を刊行しています。その後、B地区7,700m<sup>2</sup>を着手し、平成10年に発掘調査を完成了。

A地区的発掘調査は平成7年9月20日から平成8年10月31日まで行なわれました。

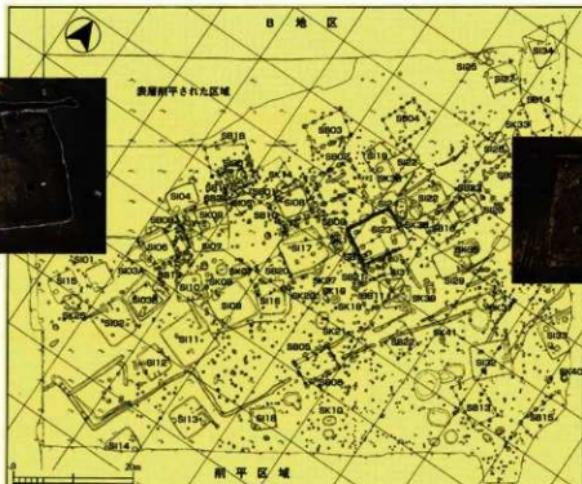
その結果、額見町遺跡は飛鳥時代から平安時代に営まれた集落跡で、家の跡や、壊れた土器などを捨てた穴、屋外で煮炊を行なったと思われる跡が発見されました。家の跡には、堅穴住居跡と掘立柱建物跡という構造の異なる2種類の建物があります。古代の堅穴住居跡は、カマドを持つのが特徴です。A地区では、通常とは違う形態のカマドをもつ堅穴住居跡が7軒発見されました。それは、煙道が壁沿いにLの字に曲がる大きなカマドで、オンドル状造構といわれる渡来系のカマドです。オンドル付きの堅穴住居跡は飛鳥時代前半の、額見町遺跡で一番古い時期で見つかっています。額見町遺跡の集落が造られ始めた時期に、渡来人が集団で移住したことを裏付ける資料として、大変注目を浴びました。

堅穴住居跡は飛鳥時代のものが中心で34軒、掘立柱建物跡は飛鳥時代から奈良時代にかけてのものが24棟確認されました。これらは一度に建てられていたわけではありません。これらの家の跡から判断すると、だいたい3軒から5軒のグループで長い間に渡って村が営まれてきたと言えます。また、家の跡がほぼ北を向いて建てられていて、きれいに配置されていました。計画的に集落が作られたようです。

遺物では、多くの須恵器・土師器のほか製鉄関連資料がまとめて確認されました。また、須恵器窯で使用される焼台、陶硯や律令祭祀具・鳥形須恵器などの特殊なものも出土しました。



額見町遺跡調査区域区割り図



A地区遺跡平面図

### III. 今度の調査でわかったこと

#### 1. B 地区の調査概要と全体像

B地区の調査は、平成8年10月1日から平成10年10月7日まで行なわれました。この間2度の越冬をしています。B地区はA地区の西側に位置し、A地区の延長上にあたりますが、この内3分の1が地形の関係で既に削平されていました。それでも竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡80棟、土器を捨てた大きな穴が12箇所見つかっています。また、古代末の土器だまりも数箇所見されました。

A地区と同じように、竪穴住居のうち6軒にオンドル状造構を確認しています。また掘立柱建物と竪穴住居の複合形態をもつ竪穴住居跡を3軒確認しています。掘立柱建物跡はほとんどのものが主軸をほぼ北に向けており、北西側区域に絶柱の倉が5棟見つかっています。どういった住居跡であったかは、後で詳しく説明します。

B地区は、A地区に比べ住居跡や生活の跡が非常に密集していました。掘立柱建物跡はA地区的4倍の数が増えています。これまで見つかった住居跡の時期をわかる範囲でおおまかに追ってみましょう。額見町遺跡の集落が営まれ始める7世紀前半から後半にかけては、竪穴住居跡中心であるといえます。そして、竪穴住居跡は8世紀に入ると急激に減り始めるようです。これに対して、掘立柱建物跡は8世紀のものが多く増えてゆきます。竪穴住居から掘立柱建物へと住居の形態が変わっていましたことがわかります。



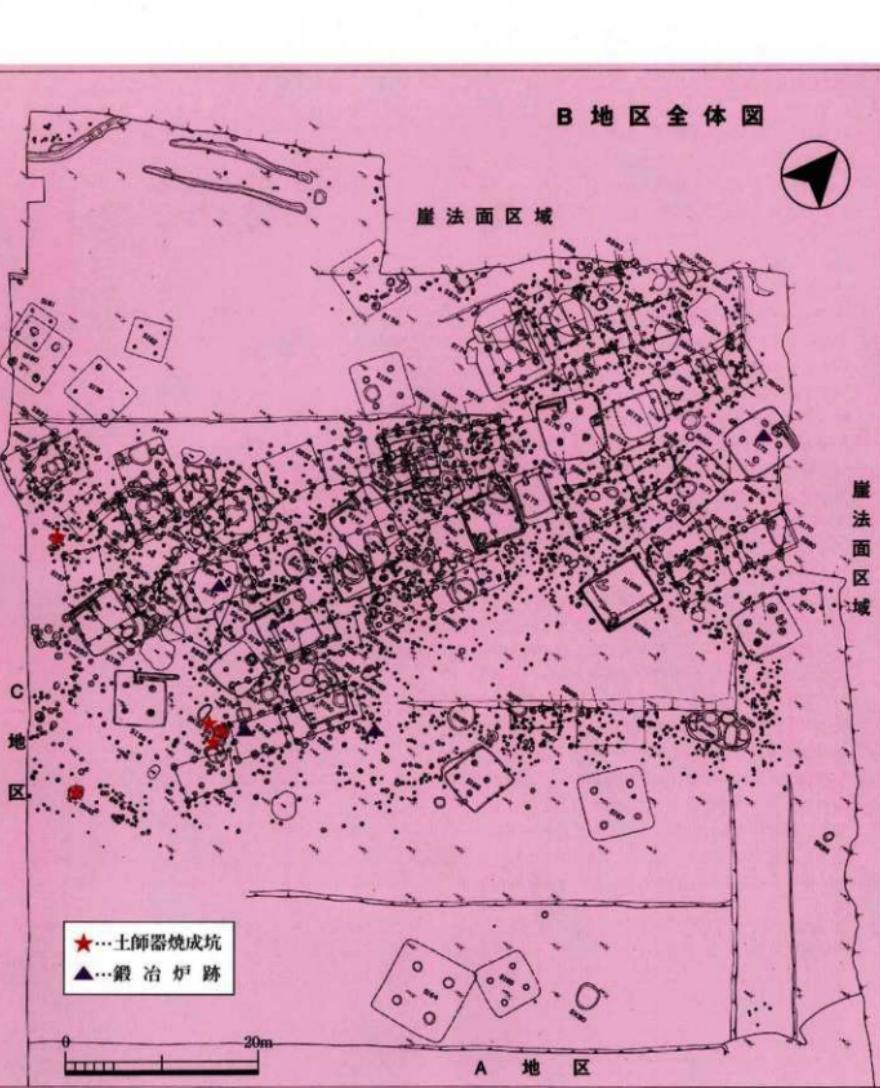
額見町遺跡B地区全景写真

## B 地区全体図



崖法面区域

崖法面区域



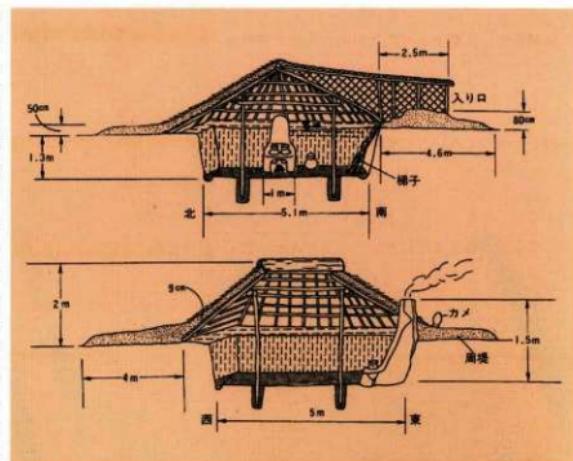
額見町遺跡B地区全体図 (1/500)

B地区的調査で、新しく見つかったものがあります。それは、土師器を焼いたと思われる跡が5箇所、製鉄鍛冶を行なった跡が4箇所発見されたことです。そして、屋内外から多くの手工業生産関連の遺物が多く見つかっています。製鉄鍛冶を行なった炉の跡は、オンドル付きの竪穴住居跡からも見つかっています。これは、額見町で生活していた渡来人が製鉄鍛冶を行なっていた証と言えます。

## 2. さまざまな竪穴住居跡

### 竪穴住居の復元

竪穴住居とは、額見町遺跡A地区概報でも述べたように、地面を一段掘り下げた竪穴の中に主柱を立てて屋根を支える建物で、绳文時代から続く原始・古代の一般的な住居様式です。これまでの研究で、竪穴住居の大半は竪穴の土壁をそのまま家の壁として利用して屋根が地面に直接かかる「伏屋根」と呼ばれるものであったと考えられており、さらには屋根が土で覆われた土屋根が一般的だったと言われています。額見町遺跡の竪穴住居跡からは、伏屋根であることを積極的に示す資料は出ていませんが、カマドや柱配置から考えて、竪穴の壁がそのまま直立して屋根がかかる構造ではなく、竪穴壁外にも住居空間が及んでいたと考えています。つまり、伏屋根に近い構造であったと予想しており、四本主柱で屋根を支えるものはもとより、竪穴壁沿いに六~八本の細い側主柱が建つ構造のものであっても、同様の建物構造であったと考えています。ただし、竪穴内に正方形に四本柱が配置されるものと竪穴外に長方形に柱が配置される側主柱では竪構造に違いがあったものと予想しており、特に後者の家の壁は側柱の建つ側のみ竪穴の壁よりもひとまわり外側に存在していたものと予想しています。柱の建て方は異なっていても、これまで述べたような建物は伏屋根に近い竪穴住居構造をもっている点で、類似した住居構造であると考えられます。



伏屋根構造の竪穴住居復元図（石井1994より転載）



四本主柱をもつ竪穴住居跡 (SI39、飛鳥時代中頃)



側二本主柱をもつ竪穴住居跡 (SI73Ⅱ、飛鳥時代後半)



側六本主柱をもつ竪穴住居跡(SI75、飛鳥時代中頃)

### 飛鳥時代後半に出現する新たな竪穴住居構造

これまで述べた伏屋根構造と予想される竪穴住居に対して、板壁などで住居壁が作られ、その上に屋根がかかる壁立ち構造と思われる竪穴住居が存在します。住居跡の特徴は、正長方形の竪穴であること、竪穴の横沿いに溝が巡りその中に深い支柱穴が等間隔で全周すること、四本の主柱穴が長軸上の壁近くないしは壁外に存在することなどで、横沿いの溝には板塀の痕跡が確認されます。主柱の配置が不規則な点や壁支柱が掘立柱建物の柱と同様の機能を有するか疑問視される点などから住居構造の復元までは至っていませんが、掘立柱建物と伏屋根式竪穴住居との折衷的建物構造をもつのではないかと予想しています。この竪穴住居跡は、飛鳥時代後半に新たに出現するもので、



壁溝・壁支柱をもつ新型竪穴住居構造(SI69、飛鳥時代終頃)



壁溝・壁支柱をもつ竪穴住居(SI54、飛鳥時代終頃)

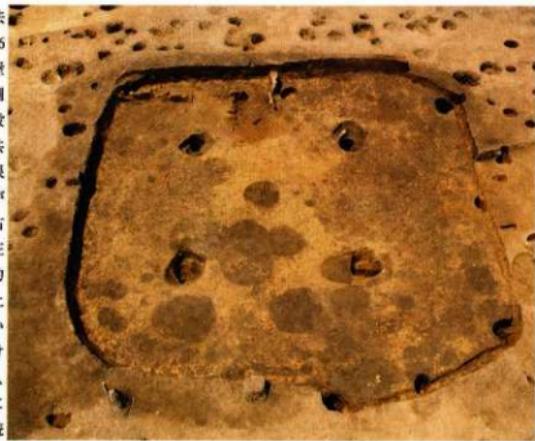


竪穴壁沿いに掘られた壁溝と溝内に均等配置する支柱穴



壁立ち竪穴住居のカマド  
(竪穴隅に斜めに設置される)

後半でもやや古手のSI76がこの建築方法の導入を示すものと考えています。SI76はオンドル状造構をもつ四本主柱の伏屋根的な竪穴住居ですが、この住居の右側の壁には壁立ち構造の壁支柱と壁溝が設けられており、両構造が一つの建物に共存する形となっています。ただ、伏屋根式と壁立ち式が共存すること自体矛盾があり、建物左側の土壁のラインよりも右側の壁溝ラインがひとまわり外側に存在していることなどから考えても、構造的には右側の壁立ち式がそのまま左側の土壁の外側に巡るものであったと考えています。このような特殊形態のSI76を除けば、A地区のSI23、B地区のSI54、SI69、SI71など、いずれも飛鳥時代終わり頃に位置付けられるもので、奈良時代に継続して行く建物構造と言えます。



右側半分のみ壁支柱・壁溝をもつ竪穴住居跡(SI76、飛鳥時代後半)

### オンドル状造構をもつ竪穴住居跡

飛鳥時代の竪穴住居の壁には煮炊き専用のカマドが作り付けられます。カマドは通常、煙道（煙突）が家の壁からそのまま戸外へ出て行きますが、額見町遺跡では煙道がL字型に曲がって壁伝いに家中を巡るオンドル状造構と呼ばれている特殊なカマドが作られています。オンドル状造構は朝鮮半島や極東アジアから伝わった渡来系のカマドと性格付けられているもので、国内ではこれまでに50遺跡程度確認されただけのものであり、このようなカマドが出土すれば、ほぼ渡来人が移住したことを示すと考えられています。このような全国的に珍しいカマドが、額見町遺跡ではA地区で7軒、B地区でも6軒確認されており、今後の調査でさらに増えるものと予想されます。

B地区的調査で発見されたオンドル状造構をもつ竪穴住居跡は、正方形竪穴に四本主柱が均等配置されるもので、飛鳥時代前半が2軒、飛鳥時代中頃が2軒、飛鳥時代後半（古手）が2軒確認されています。A地区で発見されたものがいずれも飛鳥時代前半に位置付けられたこ



飛鳥時代前半のオンドル状造構をもつ竪穴住居跡(SI38)



飛鳥時代中頃のオンドル状造構をもつ四本主柱竪穴住居跡(左: SI35、右: SI36)

とから、以前まとめたA地区的報告には飛鳥時代後半になると通常のカマドへ変化して行ったと予想しましたが、今回の調査成果から、飛鳥時代後半まで存続することが分かりました。飛鳥時代後半には小型の竪穴住居跡が主体となっており、四本主柱竪穴住居跡でオンドル状造構をもつものは大型竪穴に限られる傾向があります。この竪穴のカマドは破壊されることが多く、その実態はよく分かっていませんが、完存するカマドは全てオンドル状造構であることを考えれば、大型竪穴においては通常のカマドに変化した可能性は低く、変化したとしてもオンドル状造構の系譜にあると予測します。ただ、飛鳥時代後半になって通常のカマドを採用する小型竪穴住居が増加することにより、オンドル状造構をもつ竪穴住居の割合が激減することは間違いない、大型竪穴住居の衰退をもって消滅するカマドと言えそうです。



飛鳥時代後半のオンドル状造構をもつ竪穴住居跡(SI72)

各時期のオンドル状造構を見て行くと、飛鳥時代前半の重厚でしっかりした作りから、大型である点は変わりませんが、中頃以降、壁が薄くなる傾向をもち、煙道との境に隙壁を設けて煙道へ抜ける火を抑える構造のものが目立つようになります。このような形態は他の地域で確認例がないことから、額見町遺跡の中での形態変化である可能性をもち、初代の渡来人たちが地域にあったタイプのオンドル状造構にアレンジしていくものと予想します。



飛鳥時代前半のオンドル状造構(SI38)



飛鳥時代中頃のオンドル状造構(煙道壁側から障壁が張り出す。左はSI35で障壁部に切石設置。右はSI36。)



飛鳥時代後半のオンドル状造構(左はSI72で両側から障壁が張り出すタイプ。右はSI76で煙道側からのみ張り出す。)

#### 土器を部材に転用したカマド

飛鳥時代中頃以降、中小型竪穴住居には小型カマドを作り付けされます。オンドル状造構同様に、焚口や窓を支える支脚を石で作るものが多いのですが、SI39の土師器小型壺を伏せて支脚に転用したものやSI73Ⅱの土師器長胴壺を伏せて袖石の代わりとするものも見られ、さらに粘土で専用に作った土製支脚も飛鳥時代終わりには出現してきます。



土師器壺を転用してカマド部材に使用する小型カマド(左:SI73Ⅱ、右:SI39)

### 3. 挖立柱建物跡に見る家と倉

#### 掘立柱建物跡とは？

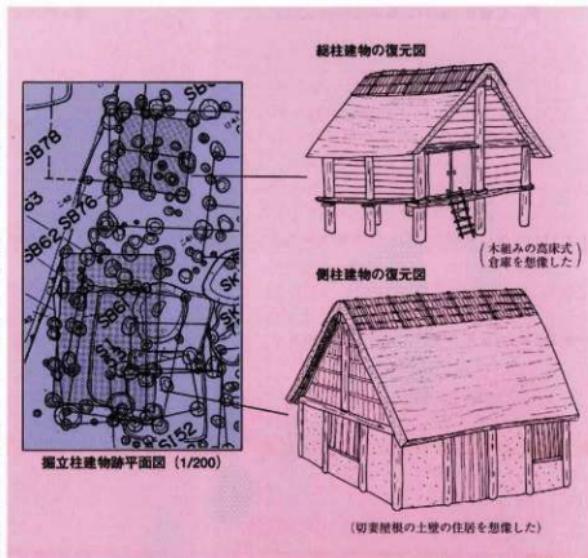
掘立柱建物とは地面を掘り込みますに平地に建てられる建物で、遺跡からは長方形ないしは正方形に並ぶ柱穴のみ確認されます。巨大な館や官舎跡を初めとして、寺院、一般居住用建物、倉庫、そして小屋のような簡単な建物も含まれます。柱穴の配置や規模、柱の太さによって、その建物の性格が復元できるわけですが、現存する古代の神社、寺院などの建築様式は、このような掘立柱建物跡の復元に大きく役立っています。

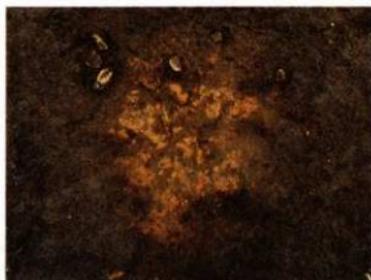
掘立柱建物跡は弥生時代以前からある建物様式ですが、飛鳥時代にはかなり普及していたようで、額見町遺跡では飛鳥時代前半から存在します。竪穴住居跡が奈良時代以降激減し、消滅することに伴って、掘立柱建物跡が増加するようなので、額見町遺跡では奈良時代以降、竪穴住居から掘立柱の平地住居へ建物様式が移って行ったと考えています。奈良時代以降も掘立柱建物跡の発見は続き、平安時代後期まで存続することが確認できています。

#### 掘立柱建物跡の形と機能

掘立柱建物跡は、柱の配置によって外周のみ柱が並ぶ側柱建物と、升目状に柱が並ぶ総柱建物とに別れ、側柱建物は一般的な住居をはじめに、倉庫、作業場、小屋として、総柱建物は倉庫としての機能をもっていたと予想されます。

額見町遺跡で発見される側柱建物は4~5m×6~7mの30m<sup>2</sup>前後の長方形建物が一般的で、竪穴住居とはほぼ同規模か、掘立柱建物跡が壁立ち建物であることを換算すれば、竪穴住居よりもやや小ぶりの住居面積をもつと言えます。竪穴住居のような生活や家の痕跡を残すことが少なく、不明な点が多いのですが、土間のまま板敷きの床で、柱の立ち並ぶ面に土壙ないしは板塀が存在していたものと予想されます。竪穴住居跡で見られた粘土で土壁に作り付けるカマドではなく、土器で作った移動式のカマドがその代用と考えられますが、遺跡から出土する量は少なく、大量に出土する焼けた切り石の存在を考えると、石で組んだような圍炉裏が家の中に設置されていた可能性は高いと思われます。竪穴住居で暖房の機能も保有していたカマドの代用として、厳しい冬の季節には活躍していたと予想されます。また、掘立柱建物跡の密集する区域に粘土の焼けた部分があり、周辺から煮炊きに使った土製の鍋や壺、そして土製支脚が出土することから、屋外で集団で使用するような石組みのカマドに似たものも存在したのではないかと考えています。冬は室内に、夏はこのような火処を屋外にもち、季節の変化に対応していましたものと考えています。





掘立柱建物の屋外にある焼床面(SJ15)



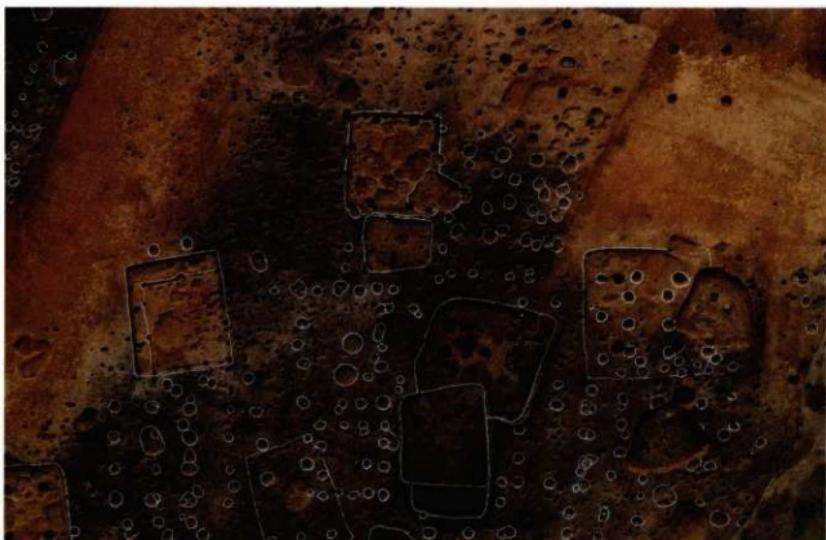
飛鳥時代後半以降の土製支脚

#### 密集する掘立柱建物跡

A地区とB地区を合わせ、掘立柱建物跡は100棟以上確認できており、特にB地区だけで80棟の集中を見ます。A地区が堅穴住居を中心とするような比較的古い時代の集落区域であったのに対し、B地区は飛鳥時代後半～奈良時代以降の集落区域であったことに掘立柱建物跡集中の原因がある訳ですが、これだけの区域におびただしい数の建物が存在していたことは、長期にわたって住み続けた集落であったことを示します。また、比較的どの建物も北に方位をあわせて整然と並んで建てており、道などによって集落の区割りができていたことを予想させます。



掘立柱建物跡が密集して建て替えられている様子



掘立柱建物跡が北に方位をあわせて整然と建てられている様子(鶴見町遺跡B地区北東側区域)

## 4. 土器作りと渡来人

### 土器を焼いた穴の発見

額見町遺跡では土師器と言われる肌色ないしは赤く焼き上げた土器が多量に出土していますが、B地区からは土師器を焼いた土師器焼成坑と呼ばれる穴が5基発見されました。土師器はおよそ700~800度の比較的の低温で焼成可能な焼き物で、赤く発色する特徴は酸素が十分に供給されて焼かれたことを示しています。縄文時代から続く野焼きと言われる土器焼きですが、縄文時代と違う点は、土器の焼く場所に穴を掘ったことと、下からの火力で焼くために下に薪を敷いたこと、少ない燃料で効率よく焼くために稻藁で覆いさらに燃焼を抑制する生草や泥などを乗せ保溫効果を高めたことなどが上げられます。この土器焼き技術は野焼きの中でも覆い焼きと呼ばれています。

覆い焼きによる土師器焼成の復元と手順



①穴を掘り薪を敷いて土器を並べる。



②土器の上を藁で覆い、さらに生草を乗せる。



③下に藁に点火する。火は上がらず、煙だけが出る。



④薪燃料が燃え尽きてから中の土器を取り出す。

土師器は拠点的な村を中心として村々で焼かれていたものと考えられていますが、通常は土器を焼く場所を特定したり、穴を掘ったりすることは少なく、遺跡から発見されることは稀と言えます。つまり、土師器焼成坑の存在は、村々で行っているような土器焼きを意味するものではなく、その村で土師器を集中的に量産していることを物語っていると考えています。



平安時代中期後半の土師器焼成坑（左：SK43、右：SK44。橙色に変色している所が強く焼けた部分）





平安時代中期後半の土師器焼成坑とそこに残されていた焼き弾けたり焼け歪んだ土師器塊 (SK49)

### 土師器焼成坑と窯跡群

土師器焼成坑は、弥生時代中期以降、北部九州などで一部発見されるようになりますが、全国で確認されるようになるのは飛鳥時代以降です。南加賀地域ではここから数kmほど離れた栗津周辺の丘陵地帯で確認されており、須恵器と言われる陶器質の焼き物を焼いた窯跡群の中で発見されます。戸津町や二ッ森町ではこの土師器焼成坑が群集して作られる場所が何カ所か確認されており、奈良時代から平安時代中期前半までの間、この丘陵地に土師器を集中的に大量生産する製陶工場のようなものが存在したことが判っています。額見町遺跡で発見された土師器焼成坑は飛鳥時代後半のものが1基と平安時代中期後半のものが4基であり、ちょうど丘陵地で土師器作りをしていました時期の前後で発見されることは偶然とは言えないでしょう。額見町遺跡で土器作りをしていた人間が丘陵地の窯場に行って、土師器作りを始めたとは考えにくいですが、窯場で土師器作りを行っていた人間たちが丘陵地を離れ、当地で土師器作りを行ったことは十分に考えられることです。平安時代中期後半の土師器焼成坑が窯場のものと形がよく似ていることもそれを物語っていると言えます。

### 渡来人が作った土器

飛鳥時代後半に額見町遺跡で土器作りを行っていた人は、土師器焼成坑から出土する土器が地元によく見られる鍋や甕である点から、地元民である可能性は高いのですが、朝鮮半島ないしは極東アジアからの渡来人を予想させる住居跡が多数発見されていることを考えれば、渡来人も土器作りにかかわっていた可能性は十分にあります。それを示す資料として朝鮮系軟質土器が上げられます。朝鮮系軟質土器とは朝鮮半島の土器に似せて日本で作られた土器のことで、ロクロを使ったり、板で表面を叩く作り方、全体的な形や把手に地元にはない特徴が見られます。朝鮮系軟質土器が額見町遺跡で作られた証拠はありませんが、朝鮮系軟質土器を作る粘土の質が地元の土器とよく似ていることや朝鮮系軟質土器が出土していく飛鳥時代後半の土師器焼成坑が発見されていること、そしてこれまでの研究成果から土師器焼成坑自体が朝鮮半島からの導入の可能性があることなどを考え合わせれば、額見町遺跡の渡来人が土器作りに積極的にかかわっていたものと予想します。



飛鳥時代後半の土師器焼成坑 (SK52)



飛鳥時代後半の朝鮮系軟質土器

## 5. 鍛冶炉と鉄器作り

### 鉄器作りと鍛冶炉

額見町遺跡ではA地区から鉄器作りをした時に出る鉄カスが多く出土しており、鉄器作りの村であることが判っていました。当時の鉄作りは砂鉄を溶かして鉄分のみを塊とする砂鉄製錬と、できた鉄の塊を熱で柔らかくしてから叩いて鉄器を作る精錬鍛冶・鍛錬鍛冶とに別れており、砂鉄精錬は丘陵地の製鉄工場で行われていました。額見町遺跡では鉄の塊から鉄器を作る鍛冶の段階の作業が行われており、鉄カスの量から判断するに、鉄器を他の村々に供給するようかなりまとまつた生産が行われていたものと判断されます。

鍛冶は鉄塊を柔らかくする工程で鍛冶炉が必要となりますですが、鍛冶炉は小型である上に大きな掘り込みをもたないため、A地区では確認できませんでした。しかし、B地区からは堅穴住居の中に作られた飛鳥時代後半と飛鳥時代終わり頃の鍛冶炉が各1基、屋外に作られた平安時代と思われる鍛冶炉が2基発見されました。いずれも炉本体ではなく、黒灰色に焼けた炉の底のみ残っていただけですが、そこから鉄を叩いた時に飛び散った薄い膜のような鉄カスや湯玉といふ粒状の鉄カスが多量に発見されました。

通常、古代の鍛冶炉はカマドのように粘土で炉本体を作るのですが、額見町遺跡は焼け石に鉄カスが溶けて付着した例が目立つことから、A地区的報告では石組みの炉を想定しました。しかし、今回の炉跡調査では石組みであることを確定できる資料がなく、加えて粘土で作られた炉の壁の破片が出土していることを確認し、粘土作りの鍛冶炉も存在した可能性が出てきました。石組み鍛冶炉は全国的にも類例に乏しく、当地への製鉄技術の導入を考える上でも重要な問題と言えます。

### 鍛冶の開始と渡来人

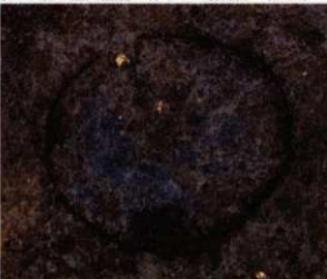
額見町遺跡の性格や位置付けを考えるにおいて、製鉄鍛冶がいつから始まったのかはとても重要な問題です。A地区的調査ではその点が不鮮明でしたが、B地区的調査で飛鳥時代後半の堅穴住居の中に作られた鍛冶炉が発見され、加えて飛鳥時代中頃の堅穴住居跡から普遍的に鉄カスが出土し、飛鳥時代中頃には定量の鉄器生産が行われていたことがわかつきました。集落形成時期の飛鳥時代前半にさかのぼる資料は現在出ておらず、たとえさかのぼったとしても中頃以降の生産量とは一線を画すものであったと予想します。鍛冶炉をもつオンドル状造構付きの堅穴住居からは当遺跡で最も古い時期の陶硯が出土しており、鉄作りの工人が村の中でどのような位置にあったのかを示すものと言えます。この鍛冶炉を家の中にもつ飛鳥時代後半の堅穴住居にはオンドル状造構が付いており、さらに鉄カスを出土する飛鳥時代中頃の堅穴住居にもオンドル状造構が存在すること、渡来人と製鉄鍛冶を積極的に結び付ける資料と言えましょう。



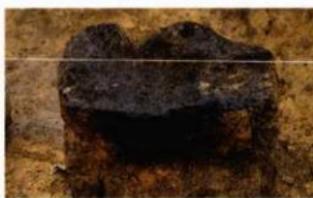
S172床面出土の粘土製フィゴ羽口(送風管)



飛鳥時代終わり頃の堅穴住居に作られた鍛冶炉 (S139)



平安時代頃の屋外に作られた鍛冶炉(SJ01)



飛鳥時代後半の堅穴住居に作られた鍛冶炉  
(上:S172の鍛冶炉の位置、下:鍛冶炉断面)

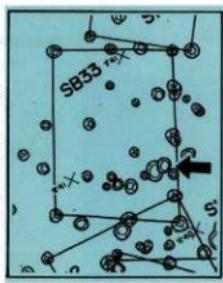
## 6. 土器を埋める祭り

### 土器を捨てる。埋める。

額見町遺跡からは大量の土器が出土しています。竪穴住居跡や大型の土坑など大きな穴であればほぼ例外なく土器は出土しており、意識的に土器が捨てられたり、埋められたりしています。土器を捨てる行為には、使用に伴う破損によるゴミとして捨てる場合が主体的だったと思われますが、信仰やまじないなどの行為に伴って捨てたり、意識的に破壊したりする場合もあったと予想できます。これに対し、土器を埋める行為は、墓の副葬品や墓の祭壇でお祭りを行った土器をお供えのものとして埋める行為が代表的と言えますが、建物を建てる時の地鎮祭や水や火の神様にお供えする意味で入れられるものもあり、その在り方は多様であったと言えます。ただ、捨てる行為よりは信仰やまじない、お祭りなどの精神文化に直結する場合が多かったと考えられます。

### 奈良時代の土器を埋める祭り

飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物へ意識的に土器を埋めた事例はあまり目立ちませんが、奈良時代に入ると確実に土器を埋める行為が増加してきます。額見町遺跡からは奈良時代前半の掘立柱建物跡の敷地内に浅い穴を掘り、そこに完全な形の須恵器瓶を入れたものが確認できました。このような事例は建物を建てる前の地鎮に伴うものと考えられており、柱穴に柱とともに埋められるものもあります。



奈良時代前半の掘立柱建物に地鎮埋納された須恵器（SB33）

### 平安時代の土器を埋める祭り

平安時代に入っても、掘立柱建物の地鎮のために土器を埋める行為は続けられますが、平安時代中期頃になると須恵器に代わって土師器の壺や皿が大量に埋められるようになります。額見町遺跡では平安時代後期にこのような土師器壺皿を大量に埋めており、完全な形のまま何枚も重ねて埋められたものも多く確認できました。この土師器食器は須恵器よりも作りの悪い素焼きのもので、大きさや形も種類が減っており、1回ないしは少ない使用で埋め



平安時代後期の土師器食器を大量に捨てた窓地

られるような性格をもった食器であったと予想されます。儀礼や行事、祭りなど様々な非日常の生活の中で、飲食に使われた特別の食器の位置を占めていたものと性格づけられます。このような少ない使用によって捨てられる食器は、その後小さな杯状の皿に変化し、鎌倉時代、室町時代にも受け継がれ、赤く発色する土師器と白く発色する土師器に作り分けされるようになります。今の紅白や水杯につながるものかもしれません。



大量に出土した平安時代後期の土師器皿

## IV. 土器は語る

### 1. 遺物整理の仕方

発掘調査ではたくさんの遺物が出土します。出土する9割以上を占める土器などは殆ど壊れてかけらとなっています。これらを洗い接合し元の形に戻すことで、年代をはじめ多くのことを読み取ることができます。これは次章で詳しく書くことにします。

額見町遺跡の発掘調査現場では発掘調査と並行して室内で遺物を整理・復元する作業を行なっています。さて、ここではどのように整理・復元作業を行なうか見てきましょう。

#### ①遺物の洗浄

まず遺物のよごれをきれいに落します。須恵器は固めのブラシ、土器は柔らかいハケで丁寧に洗います。その後しっかりと乾燥。



#### ②注記

1つ1つの土器片にどこから出土したかを注記(ネーミング)します。



#### ③分類

注記した遺物を分類する作業です。

まず出土した住居跡とか柱穴などのおののおのの出土地点別に、土器類・須恵器を分けます。これらにはいろいろな形があり、例えば土器類では瓶・鍋・長甕・小甕・高杯などなど様々な種類があります。まず種類別に分類してゆきます。さらに口縁部同士、胴部同士、同じ調整痕同士、土器の色が似ているもの同士というふうに分けて行きます。これで1つの出土地からどのくらいの種類の土器が出土したか知ることができます。また、土器同士を接合して復元するための下準備にもなります。



分類しているところ

土器類のかけら  
を長甕と瓶に分類したところ



土器



須恵器



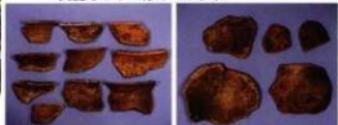
長甕のかけら

長甕と瓶の違いは、口の部分が曲がっていて底があるのが長甕。瓶は口の部分がまっすぐで底に穴があいている。厚みも違う。



瓶のかけら

長甕をさらに分けましょう



口縁部 (甕の口部分)

底部 (甕の底)



分類された土器

## ④接合と復元

復元するために土器のかけら同士をくっつける作業です。

ここまで過程で①から③の間にくっつけられるものはあらかじめ接合しておきます。古代の土器には、ろくろで作るときにできる跡、土器をしっかりと叩き締める時にできる跡、また土器が厚くなったり部分を削った跡などの調整痕が残っています。これらの跡は土器を接合する時の目安となります。

接合後、土器片の足りなかった部分や弱い部分を補強します。額見町遺跡では樹脂をきれいに練り込んで補強します。

### 調整痕のいろいろ



## ⑤実測

どのような遺物が出土したのか、私達にはそれを皆に知らせる義務があると言えるでしょう。しかし、実際に土器を持って行き、一人一人に見せるなどということ是不可能に近いのです。そこで、ある法則に従って土器を実測し図面にすることによって多くの人々に報告するという形をとっています。実測は、非常に正確さを要求されます。実際の遺物を見なくとも遺物実測図を見ただけで、どのような遺物であるのかが判らなければならないからです。



## 2. 古代の土器からわかること

### 土器を調べて何がわかるのか

遺跡から発見されるものは住居跡などの地面に残った痕跡と土器や石器などの出土品とがあります。住居跡などの痕跡は発掘現場で調査し、記録しますが、出土品は発掘調査が完了した後に整理・復元して、そこから調査が始まる訳です。整理の方法や過程は前のページで述べたとおりですが、ここでは出土品特に9割以上を占める土器の調査方法について簡単に触れておきます。

土器はほとんどが回転台やクロロで作ったものであるため、中心軸から対称形となっており、完全な形でなくとも上から下まである復元が可能で、このような復元可能な土器を中心に大きさや形、作り方の特徴を調べ、その土器のもつ器としての種類や性格を導き出して行きます。遺跡から出土する土器は仮に村を全て完全に調査したとしても、全て完全な形に復元できるわけではなく、大半は器の一部分の破片のまま残ります。ただ、この破片も、完全な形に復元できるものをモデルとしてどのような形のどのような土器であったのかを推定復元することができます。遺跡から出土する土器はこのような方法で種類別に分けられ、土器がどのように数量で構成されていたかを知ることができる訳です。そこにどのような人間が住み、どんな暮らしを行っていたか、どんな人の交流をしていたのか、土器を整理し、調べることによって、少しずつではありますが、その輪郭を見ることが可能で、地道な調査・研究が必要である訳です。

それではこれから、これまでの土器の研究から、どのようなことがわかってきてているのか、土器を調べることによってどのような情報が得られるのか、そしてそれが遺跡の調査や内容の実態に追るときにどのように反映されるのかを紹介して行きたいと思います。



全国各地で土器研究会は数多く行われ、その成果を元に、多くの新たな知見が提示されている。

### 食器の形と変化から何を読み取るか

日本に土器が出現した縄文時代では、貯蔵と煮炊きが主な目的でしたが、その後、形が様々に変化し、種類が増えることによって、土器が食事に直接使われるようになってきました。その始まりがいつかという問題は議論を呼ぶところですが、日常で使われる食器に近づいて来るのは須恵器が作られるようになってからと言え、古墳時代後期頃が普及する時期と言われています。古墳時代後期の食器は蓋が付いた丸い底の須恵器と内面が黒く焼かれた土器で構成されますが、須恵器はまだ普及率が低く、高級品だったようで、土器食器が主体であったようです。須恵器の形は中央の宮都で作られている形をそのまま真似て作られており、中央の生活様式に少しでも近づきたいという意識を感じ取れます。

須見町遺跡に集落が作られる飛鳥時代前半は、古墳時代とほぼ同様の構成ですが、須恵器生産が活発となって、一般に普及するようになります、須恵器と土器とがほぼ同じような割合で存在するようになります。また、当時、宮都では銅製の椀を真似たつまみ蓋の付く食器が作られるようになりますが、当地域でも数は少ないですが高級品として作られ始め、飛鳥時代中頃以降、主流となってきます。それに伴って、丸底の須恵器や内面を黒く焼いた土器が減少し、ほぼこの時期をもってなくなります。この時期の食器は前後する時期の中で、最も小さく、直径10cm以下の浅いもので、全国的に同じような傾向が見られます。食器を小さくする意図がどのようなものであったのか判りませんが、実用面とは違う所で起こった現象だろうと考えられます。

飛鳥時代後半になると、前半主流だった丸底の食器が姿を消すとともに、つまみ蓋が付く平底の食器が何種類かの大きさに分かれながら多様化し、食器の底に台の付いたものも出現します。これは卓上で安定感のある形で、奈良時



都の土器を模倣して作られた文様をもつ赤色土器

代以降はこの形が食器の主流となってきます。食器が底の丸い形から平底、そして台の付いた底に変化した理由としては、それを使用する場所が土の上など柔らかい場所から木で作られた食台など平らで硬い場所へ変化したことが予想されます。木のお膳の上にたくさんの種類の食器が乗り、宴會が催される光景が想像されますが、このようなことは宮都で始まったものが地方に広まったものと予想されます。飛鳥時代後半以降、土師器食器は内面を黒く焼いたものに代わって外面を赤く塗った赤彩土師器と呼ばれるものが出現しますが、この赤彩土師器も宮都で使われる形や装飾方法をそのまま真似て作られており、日常の食器ではなく、特別な儀式や祭りなどに使う儀礼食器として位置付けられています。古墳時代に食器が多く使われるようになって以降、中央で使われる先進的な食器を真似て地方でも作られるようになりますが、特に飛鳥時代後半以降は宮都で行われる儀礼や生活様式を再現するために、必要な用具をかなり忠実に揃えており、地方の役人や権力者にとって強い憧れと同時に重要な儀式であったと予想されます。



飛鳥時代前半の丸底型須恵器食器



飛鳥時代中頃の小型手底

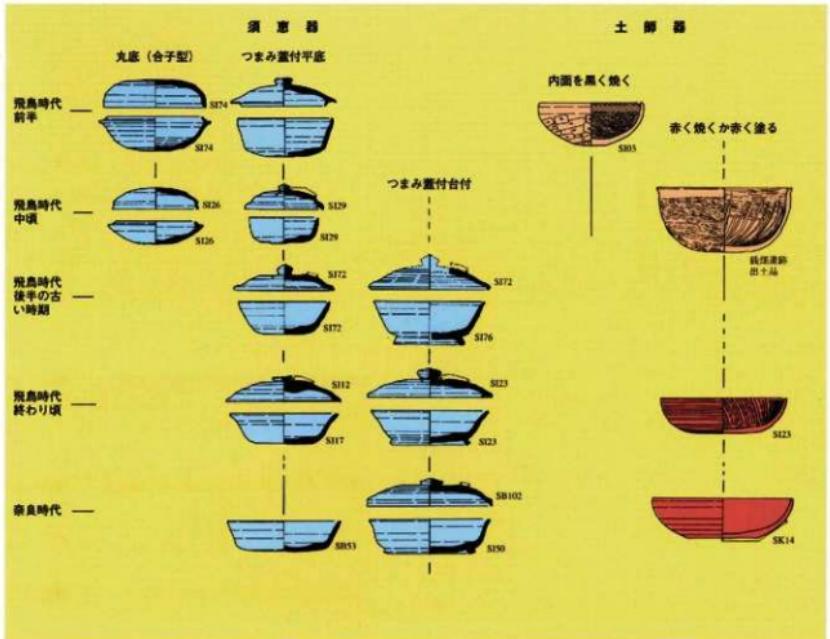


飛鳥時代後半の平底



奈良時代の台付

飛鳥時代中頃から奈良時代までのつまみ蓋付須恵器食器の移り変わり

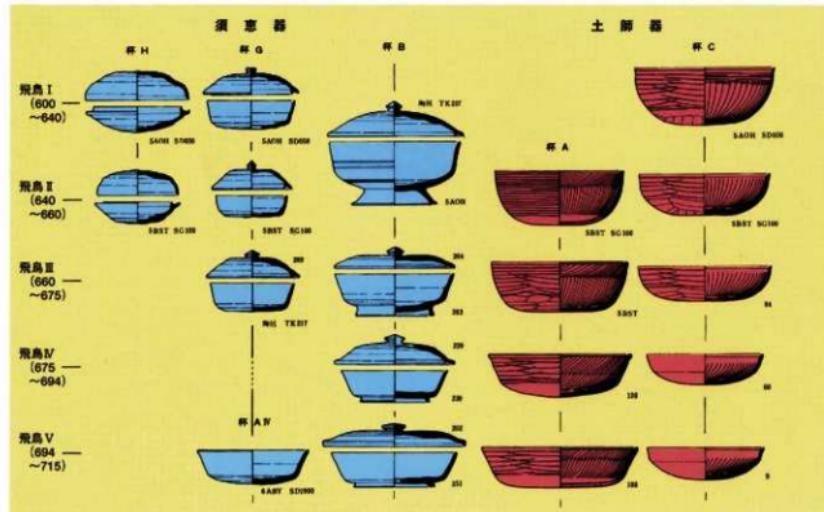


額見町遺跡から出土した土器食器の時代と移り変わり (1/6)

## 土器は年代を測る物差し

遺跡や住居跡、建物跡の年代を知る方法としては、科学的な年代測定法も行われていますが、土器から年代を推測する方法が一般的です。しかし、土器を科学的に年代測定する方法はなく、土器に年代でも書かれていなければ、土器から実際の年代を推測する方法はありません。では、なぜ土器から年代を推測できるのでしょうか。

まず、土器は遺跡から出土する場合、いずれかの地層に属して発見されます。地層は後世に手を加えられなければ、下から上へと新しくなる絶対条件があり、これを時間の前後関係として位置付け、その前後関係で出土する土器の材質・種類・形・大きさ・作り方など様々な要素で、どのような変化が見られるかを比較して行く訳です。その積み重ねは縄文時代から現代まで続く土器の変化として把握されており、時代を測る物差しができる訳です。ただ、この物差しにはその土器がいつの時代なのかを示す目盛りがなく、土器から年代測定するためにはどこかの土器に目盛りを付けてゆく作業が必要となってきます。特に文字資料が存在する古代以降のことですが、土器に年代の目盛りを付ける場合には、実際の年代が付される古代の文字資料と土器とを結び付ける訳で、古代文書などに作られた年代が記されている建物の創建時の土器資料や年代の記されている木札（木簡）と同じ地層から出土する土器資料などを使って年代が土器に一つづつ付けられて行きます。ただ、このような資料の多くは宮都ないしはその周辺のもので、地方から年代を当てはめる土器資料が出土することは極稀であり、宮都で作られた年代の目盛りを地方の中で当てはめている訳です。具体的には宮都の土器の物差しの中に入っている日本の中で広く流通する陶器や瓦などと同じものが出土した土器資料を一つの定点として定めたりしますが、そのような土器がない場合でも、須恵器の形や種類の組み合わせを宮都のものと対比することによって、ある程度の年代を当てはめることは可能です。前に述べたとおり、古代の土器は宮都を頂点として土器の様式が形成され、かなり短期間に地方へと広まる傾向にあり、土器の変化の法則も忠実に行われているためにできることです。ただし、あくまでも、この年代観は宮都で作られた物差しを基準として定められたものであり、これまでに幾度か年代の目盛りは修正されています。現段階の研究者の間でも30年程度の年代のずれが存在しており、まだまだこの分野の研究は完全なものではなく、考古学を歴史の中で位置付けるためにも地道に行って行かねばならない研究と言えます。



飛鳥・藤原宮跡及びその周辺から出土した土器食器の時代と移り変わり (1/6、西1978を改変転載。年代は西口1993を参考。)

## 土器の産地を調べる

土器は粘土を素材とする焼き物で、その粘土を細かく調べれば、土器の産地がある程度推測可能です。粘土の調査方法としては、肉眼で観察する方法が一般的ですが、化学的に粘土に含まれる元素の組み合わせを分析したり、



須恵器窯場の須恵器胎土 (製作粘土) の特徴

顕微鏡で粘土に含まれる鉱物を観察したりする方法を併用することによって、かなりの精度で粘土の識別が可能となっていました。特に、須恵器については、焼かれる窯場が限られており、そのような窯場で出土する須恵器の粘土を調べることによって、どの窯の須恵器がどのような粘土の特徴をもっているか、これまでの研究で大体判ってきています。また、土師器についても、地域ごとに含まれる鉱物の特徴や材質の違いなど少しづつ判ってきており、産地を特定するまでには至っていませんが、地元で作られたであろう土師器に対し、地元ではないと予想される土師器を抽出し、それがどのような地域のものであるかおおよそ見当がつく段階まで来ています。広域に流通するような須恵器や陶器についても同様で、広域流通品の識別や流通の在り方もだいぶ判ってきています。

このような土器の産地推定を行うことによってどのような事が判ってくるのでしょうか。例えば、遠隔地と言えるような特定地域からの土器の搬入がまとまって見られる場合、そのような地域からの移住や強い交流が想定できるでしょう。また、内容物を伴った土器の搬入であったとすれば、その内容物の流通の在り方を教えてくれる場合もあります。また、複数の産地によって土器が構成されたり、近隣の産地のものよりも遠隔地のものの方が主体を占めるような場合は、そこに行行政区割りや物資の分配の在り方、または市場の存在などが想像される証です。村を取り囲む周辺の状況と村の位置付け、地域の区割りの問題など、土器の産地推定によって復元できることは多く、現在、着実にその資料は増加しつつあります。

### 土器の使われ方を探る

土器がどのような目的で作られ、使われていたのかを考えるにその大きさと形そして材質は重要な要素です。容器は使いやすさや適した材質、形へ変化している場合が多く、現在の生活用具と直接結び付く部分もあります。ただ、現代の電化製品が普及する世の中では土製容器を使うこと自体が特殊であり、現代感覚で古来の生活用具をそのまま復元することは無理があります。そのため、一昔前まで使っていたような民具や現代も古い生活様式を維持するようなアジア諸地域の人々の生活様式、用具を参考に復元することが多く、また、文献や絵巻物などの資料を参考とする場合もあります。

土器の使われ方を復元するうえでも一つ重要な視点に、土器に使った痕跡が



カマドに掛けた長胴土師器  
(肩には又が付くがカット外の口縁部には又が付かない。)



土器小型壺の使用痕跡 (外表面は全体的に強く焼けた痕跡が残り、内面にはコケが残る。炉の使用が予想される)

残っていないか見つけることです。全ての土器に残っているわけではなく、その後の埋没している状態によって失われる場合もありますが、使用の条件によってはその痕跡を残しやすいものもあり、そのような残りのよいものを基準として、土器の使用痕観察が行われるようになってきました。特に煮炊きに使った土器のススの付着や内面についたコゲの状態、ふきこぼれた痕跡など、煮炊き具の使用痕研究は進んでおり、ススとコゲの状態によって、カマドに掛けたか炉で使ったかなど火の掛け方や、どのようなものを煮たのかなど具体的に判るようにになってきました。

また、陶器質の硬い材質をもつ須恵器については、度重なる使用によって部分的に擦り減った所や欠けた所があるか観察することによって、容器がどのような目的で使われたのか、その使用頻度、使われた場所や置かれた場所、置き方など判る場合があります。ただし、それも多くの資料を観察してはじめてできることで、実際に使ってみた場合の痕跡と比べる必要もあり、地道な研究の集積が必要となってきます。

このような須恵器は使用によって部分的に破損しても、紐や漆など使って補修したり、その部分で割り揃えて再利用するなど辛抱強く使っている事例が多く、破損した須恵器の一部分を使って硯に転用したり、カマドの部材に転用するようなりサイクルも類似に行われていました。しかし、その反面、ほとんど使用せずに、前に述べた儀式やお祭り用の土器として捨てられたり、埋められたりするものもあり、一つの種類の容器でも使われる場面によって幾通りもの在り方があったものと言えます。

土器から何がわかるのか、主に集落遺跡を復元する中で、必要な事項とその手順を説明してきましたが、土器にはこの他にも、製作・生産する時の痕跡があり、それを研究することによって、製作生産の技術を復元することができます。その痕跡には粘土から土器へ造形してゆく段階の痕跡と、焼き物として窯などで焼き上げる段階の痕跡があり、それらを詳しく調べることによって、土器がどのように製作され、焼かれたのかが分かります。そのような土器を製作する技術は現代の陶器の製作技術にも脈々と受け継がれており、土器の出現から現代までの技術の流れを追うことが可能であるとともに、それがどのような位置付けがなされるのか判ります。また、そのような技術が地域的に連続性をもって地域の枠組みを形成したり、技術導入された経路を追うことによって、額見という地がどのような地域と繋がりをもっていたのか、どのような地域の枠組みの中に存在していたのか教えてくれることもあります。土器はそのままでは何も語ってくれませんが、こちらが努力し、情報を引き出す術を習得すれば、いろいろなことを語ってくれる古代のレコードなのです。宝の持ち腐れとならぬように、我々は日々研究に従事し、自分の技術を磨く必要があるのです。



須恵器蓋内面を墨入れに使っている



台の付いた須恵器食器の底を硯に転用



小学生を対象とした額見町遺跡体験発掘の様子

## さいごに－調査結果より－

さいごに、これまでの成果から、額見町遺跡はどのような性格なのかを考えてみたいと思います。

まずこの額見町の地で長い間で渡り集落が営まれたということです。飛鳥時代前半から奈良時代を経て平安時代まで営まれた事実は、重複する家の跡や生活の跡が物語っています。そして、集落が営まれ始めた当初からオンドル状造構を伴う堅穴住居跡が存在するという事実があります。オンドル付きの堅穴住居の軒数から考えて、おそらく集落形成時に渡来人の集団移住がなされたと想定できます。ではなぜ渡来人の移住があったのでしょうか。A地区調査完了段階では、多くの製鉄鍛冶遺物や窯場で使用する遺物が見つかったことで手工業生産にかかわった技術者集団だったのではないかという想定がなされました。このうち製鉄技術者という想定は、B地区的調査で、飛鳥時代のオンドル付きの堅穴住居から、鍛冶関連遺物を含め鍛冶炉跡が発見されたということで裏付けられたと言えます。また、土師器焼成坑の発見や、朝鮮軟質系土器の出土は、渡来人が土器づくりに関わったのではないかという想定を強くさせています。

さて、額見町遺跡では円面鏡という丸い鏡や、転用鏡、また陶製分胴、土馬、鳥形須恵器などの律令祭祀具といった特殊遺物が大変多く見つかっています。また、西側に比較的まとまって検出された米蔵を想定する倉庫群をあわせて考えてみれば、近くに額田郡閑連の公的施設が存在するものと予想します。ただし、今までのところ、施設跡と思われるような建物跡は見つかっておらず、施設周辺をとりまく居住区であった可能性を持ちます。その初代の住人は、先の住居跡の発見から朝鮮半島ないしは極東アジアからの渡来人であった可能性が高く、村落全体の中で渡来人居住区として、かつ鉄作り・土器作りの手工業生産を担当する集落として重要な役割を担っているものと考えられます。

今回の調査成果を簡単にまとめましたが、これまでの発掘調査は、全体の調査面積の3分の1に過ぎず、多くの問題が残されています。これから先の発掘調査でその疑問を解消し、更に新しい発見、新たな事実を見い出せるものと信じています。



額見町遺跡A・B地区遠景（北西より）



1. 本書は、小松市が施行する小松市串・額見土地区画整理事業に先立って、小松市教育委員会が実施した造成用地内埋蔵文化財（額見町遺跡）発掘調査の概要報告書－2－です。

報告の内容は、調査内容の普及・啓蒙に主眼をおいたもので、簡易な文章で一般の方々に判りやすくしてあります。

2. 発掘調査の費用及び本書の印刷経費は、土地所有者である小松市土地開発公社が全額負担しました。

3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりです。

〈調査地〉 石川県小松市額見町などの部

〈調査面積〉 7,700m<sup>2</sup>（B地区）

〈調査期間〉 平成8年11月1日～平成10年10月7日

〈担当者〉 小松市教育委員会埋蔵文化財調査室 主査 望月精司 調査員 大橋由美子

4. 本書の執筆及び編集は望月・大橋が行ないました。

5. 本書を作成するにあたり、以下の文献を引用及び参考とさせていただきました。

浅川滋男 1998 「奈良国立文化財研究所シンポジウム 先史日本の住居とその周辺」

石井克己 1994 「軽石噴火で埋まったムラを掘る」「日本の古代遺跡を掘る－4 黒井峰遺跡」

鬼頭清明 1985 「古代日本を発掘する 6 古代の村」

西 弘海 1978 「藤原宮西方官衙遺跡出土土器の編年と西方官衙についての考察」「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」

西口壽生 1993 「飛鳥・藤原地域出土の須恵器」「古代の土器研究－律令的土器様式の西・東2 須恵器－」古代の土器研究会

兵庫県三田市教育委員会 1996 「おかあさんの考古学」

小松市教育委員会 1998 「額見町遺跡（額見町遺跡A地区）串・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書－1－」

望月精司 1999 「小松市額見町遺跡の調査」石川考古学研究会シンポジウム「オンドルのある村」